

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

クジは「籤」と書く。竹を細く割ったもので、未来の予言を記した竹札や紙のことだという。「龜」「孔子」とも書く。神社で引くお神籤は、竹の串に記された番号で、運勢などを占う。

ロープを束ねた田原のクジは、紐の長短で仕事の割り当てを決める工夫だったが、かつてクジで将軍職を決めたことがある。

室町時代第四代將軍足利義持は、その子義量に位を譲つたが、將軍は在職2年足らずで若死にする。義持も後継者を指名しないまま、この世を去る。慌てた幕府の重臣は、足利氏の崇敬する京都三条坊門の三条八幡宮の神前で、異例のクジ引きをし、選ばれたのが義持の同母弟の義教だった。将军軍という役割を神前で決めた訳だ。どんなクジだったかは不明である。

さまざまなクジ



県内では、秋祭りに氏神を自家に迎えて祀るトーヤを選ぶ場合や、伊勢講などを嘗むヤド（宿）を決める時などにクジを用いる。その方法には、オハライツケとフリアゲがよく行われる。

オハライツケは、伊勢神宮の剣先のお祓いを使い、半紙を小さく切り、人の名前を書いて丸めたクジを、お祓い札の先で吊り上げる方法である。フリアゲは、同じようにして丸めたクジを空の湯呑み茶碗に入れ、紙で蓋をする。蓋の真中には、小さな穴を開けておき、茶碗を振り上げて、出てきたクジが当たりで、こうして決めた役割は神意を反映したものとなる。

話は飛び、ギリシアの神々もクジをして、ゼウスは天空、ポセイドンは海洋、ブルートーンは地下と自分の支配領域を決めたという。また紀表

元前八世紀頃の詩人ホメロスの語った英雄叙事詩『オデュッセイア』では、キルケ島に漂着したオデュセウスが、偵察する部隊を決める時にクジをしている。「直ちに青銅造りの兜を用いて籤を引くと、豪勇士ウリュロコスの当たり籤が躍りでた。」とある。

同じくトロイ戦争を描く『イリアス』では、メネラーオスとパリスが騎打ちをする前、槍を放つ順番を決めるために、青銅の兜に籤を入れてゆすり、「きらめく兜の偉大なる勇士ヘクトルが、首を背けて兜を振るとたまちパリスを示す籤が飛び出してきた。」とす。古代地中海世界でも、石か何か識別できるものを兜に入れて振り、飛び出でたもので物事を決めていたようだ。

（奈良民俗文化研究所代

次回は31日